

映画『シックス・デイ』で 考える〈自己〉の問題

エレア・メビウス

1 記憶説の復活

自分のクローン人間を作ったらそれは自分なのだろうか？ ということを考えた人は多いはずだ。アーノルド・シュワルツネガー主演のSF映画『シックス・デイ（原題:The 6th Day）』はこの問題について興味深い示唆を与えてくれる。

映画の内容を簡単に紹介しておこう。映画の舞台はクローン技術が進歩して人間のクローンも作れるようになった近未来のアメリカである。ただし人間のクローンは法律で禁止されており、ペットなど動物のクローンは合法である。ペットのクローンを作っている企業は秘密裏に人間のクローンも作っている悪の組織である。その企業が事情あってシュワルツネガー演じる主人公のクローンを作ってしまう。

自分のクローンを発見した主人公は企業に殺されそうになるが、何とか切り抜け、やがてクローンと協力して企業を壊滅させる、というストーリーである。

アイデア的には珍しくないSFなのであるが、登場人物たちのクローンに対する観点が対照的で哲学的に面白い。まず悪役は、自分のクローンは自分だと思っている。しかし主人公は、自分のクローンは他人だと思っている。

悪役： 自分のクローンは自分だ

主役： 自分のクローンは他人だ

上の対照的な二つの観点がこの映画に哲学的な面白さを与えている。

映画では人の脳をスキャンして記憶をクローンにコピーできるという設定になっている。死ぬ直前の記憶もコピーできるので、クローンは元の人物の記憶を通時的に維持していることになる。つまり悪役側が自分のクローンは自分だと考えているのは、単にDNAや身体が自分と同型だからというだけでなく、自分の記憶がクローンによって維持されているということが主な理由である。

これは人格の同一性問題における「記憶説」と同様の思想である。記憶説とは、人格の同一性は記憶の持続によって決まるという説であり、ジョン・ロックによって提唱された。

しかし人間はしばしば間違った記憶を持つことからロックの記憶説には多くの批判がある。私も記憶説は考慮するに値しないものだと考えていたが、この映画を見て少し考えを変えた。

悪役の子分は途中で死ぬのだが、すぐクローンが作られて復活する。その際「殺された時の痛みを憶えている」というようなセリフがある。それは死ぬ前の自分と、死んでから作られたクローンである自分が同一の存在であるという見解の表明でもある。

それと対照的に主人公は自分のクローンを自分だとは思わない。主人公が家に帰ると、自分とそっくりの人間がいて、自分の誕生日を祝い、自分の妻や娘と親しく会話している。主人公はその人物がクローンであるとすぐに察して、クローンは違法であるため殺しても構わないと考えるが、少し迷って殺しを思い留まる。映画では細かい心理描写はないが、主人公が殺害を迷ったのは、クローンが自分と同様に

妻や娘を愛しており、過去妻や娘と生活した記憶を持ち、自分と同様に人生を謳歌する権利があると思ったからかもしれない。ここには記憶説がそう簡単に放棄できない理論であるとの示唆を感じることができる。

やがて主人公は自分のクローンと対面する。自分と同じ身体を持ち、同じ記憶を持つ人物がいたら、二人は考える。

二人の主人公が相並ぶ。実は片方の身体に小さな「クローン・マーク」がある1。



この状況で面白いのは、実はクローンの方には脇の裏に小さな「クローン・マーク」のようなものが付いていて、そのマークでクローンか否かを見分けられるという設定になっていることだ。この映画では最初「自分のクローンが不法にも作られた！」と思った方が実はクローンだっという設定である。

しかしそのネタバレのシーンで私は思ったのだが、クローン・マークなどなく、二人の主人公のうちどちらがクローンかわからないという状況にした方が哲学的に面白かっただろう。

もしどちらがクローンかわからなかったとしたら、主人公はどう考えるだろう。

人生の様々な経験を想起するはずだ。物心ついた頃のおぼろな記憶。少年期に遊び走りまわった記憶。思春期に憧れの女性に胸ときめいた記憶。就職して仕事に忙殺された頃の記憶。妻と初めてデートした時の記憶。娘が生まれた時の感動……。

いずれも二人の主人公が共有している。しかしどちらか一人は偽の記憶を与えられていて、実際には本人が経験したことではない。クローンとして数日前に作られた際にインプットされた偽の記憶である。

しかし二人には真実を確かめる術がないとしたら……。

ここで記憶説が説得力を持ち始める。記憶が現実にある限りそれは「偽の記憶」ではないのだ。「偽」と言っても真偽を確かめられないなら意味はない。記憶に真偽はないのだ。真偽があるのは記憶が指し示す過去の経験のみだが、それを確かめられないなら記憶された過去の経験は現実の経験と実質的に変わらない。二人の主人公は実際に「人生」を経験したのと変わりが無い。

通時的な人格の同一性を成立せるのは、まさに過去の経験は今この自分の経験であったという記憶のみの可能性がある。＊

＊これは構成主義的な見方であり、統覚により自己意識が構成されるとするカント哲学と近似的だろう。

なお人格の同一性を成立させるものとして、肉体でも精神でもない「魂」のような何かを想定する論者はいるが、仮に魂が存在したとしても、過去の自分と今の自分の紐帯となる記憶がなければ、「同一」と言っても実質的には意味がない。そのように考えることが出来るし、実際に記憶説を主張したロックは魂の存在を認めながらも、それを人格の同一性の十分条件とはしなかった。

記憶説は或る意味で正しいことを認めなければならない。

そう認めた時点で記憶説は発展することになる。

私は幼い頃に家族と一緒に就寝中、部屋に蛇が侵入して大混乱となったことを憶えている。何年か後に家族に聞くと、そんな事実はなかったと言う。私の経験は夢だったということにされた。しかし、もしその経験を確かめる手段がなかったとしたらどうだろう。それは現実に蛇に侵入されたことを経験したのと何も変わらないことになる。

逆に現実に経験したことでも、記憶を失ったならば現実に経験しなかったのと変わりが無いということになる。忘れた経験は「私の経験」ではない。

何年か前に叔母と思い出話をしたことがある。自分が小学生の頃、学校の帰りに叔母と偶然会って、公園で一緒にパンを食べたことがあると叔母は話した。ところが私にはそんな記憶が全くなかった。何十年も前のことだから忘れていても不思議はないが、私は「自分が憶えていない自分」がいることに強い違和感を感じた。

記憶説の観点からすると、それは「自分の経験」ではないのだ。

私は蛇に侵入されて混乱した経験がある。しかし叔母と公園でパンを食べた経験はない。人格の同一性問題においては、蛇に侵入されて混乱した人物は「私」である。しかし叔母と公園でパンを食べた人物は「私」ではない。

記憶説が正しければそういう結論になる。

実在論論争においては「真理対応説」という理論がある。人の認識は実在と正確に対応しているという主張だ。映画シックス・デイが示唆したことは、人格の同一性問題においては、記憶説は真理対応説を超越した理論かもしれないということだ。

私は時々、自分の過去の経験は全て夢か幻だったのかもしれないと思うことがよくある。しかし記憶説の妥当性を認めるならば、過去の経験が実在しておらず夢で

あり、真理対応していないとしても、それは現実の経験と実質的には何も変わらないということになる。記憶説はこのように発展するのだ。

しかし記憶説とはあくまで認識論的な問題に留まる。やはり存在論的には、心身ともに同型の主人公が二人いても、過去の主人公と数的に同一なのは片方のはずである。

この映画の終盤では、その認識論的問題と存在論的問題の差異が描かれるシーンがある。悪役のボスは銃で撃たれ重傷を負う。自分が間もなく死ぬことを察したそのボスは、自分のクローンを作ろうとする。冒頭で紹介したように、悪役側は自分のクローンは自分だと思っているから死についても不安がない。クローンはいくらでも作れるので、事実上の不死を実現したというセリフもある。

2 認識論から存在論へ

ところが、そこで奇妙な状況になる。自分はすぐに死ぬと思ったボスはすぐには死なず、そして自分が生きている状態で自分のクローンと対面することになる。ここがこの映画で一番面白いシーンである。

生まれたての自分のクローンと対面したボスには当惑がある2。



この時ボスには「自分はひょっとしたら大変な勘違いをしていたのではないか」という疑念が生じたに違いない。自分と心身ともに同型の存在がそこにいる。しかしそいつは「私」ではない。この状況で「こいつは自分とそっくりだから自分だ」

と思える人はよほど鈍感な人だろう。いくら自分と似ていて、仮に自分と同じタイプの痛みを感じていても、自分から見ればクローンは他人である（「私」と質的に同一であっても数的に異なる存在者である）。ボスが自分のクローンと対面した時、それは哲学的な存在論的同一性問題との対面でもあったのだ。

認識論的には、記憶は人格の同一性の十分条件だとみなせる。しかし、それで人格の同一性の存在論が消滅するわけではないのだ。存在論的には、記憶は同一性の必要条件ですらないのだ。

惜しいことに映画はエンターテインメントのため、そのような哲学問題を深堀しないうままアクションシーンに入って終わってしまった。映画が深堀しなかった問題を私は探求しなければならない。

仮に自分のクローンが何十人として同じタイプの「歯痛」を感じていたとしても、彼らの痛みはこの私の痛みではない。

歯痛と言っても色々あるが、以下では同タイプの歯痛が私とクローン三人にあると想定する

人物 1 : 「私は歯が P 程度痛い」

人物 2 : 「私は歯が P 程度痛い」 (今この私)

人物 3 : 「私は歯が P 程度痛い」

心身のタイプが同じ人間が三人いても、現実に痛いのは私だけである。「私」は比類者のない唯一の存在である。この直観が存在論的同一性問題の嚆矢となる。

存在論的には、私のクローンは私ではない。他人である。悪役のボスが自分のクローンと対面した時にわかるように、クローンがいくら自分と極似していても、そいつは他人である。これは同時に存在する二人の人物が同一の存在者ではないというわかりやすい状況だからそう判断できる。

映画の途中で悪役の子分が死んでクローンが作られ、そのクローンは自分は死ぬ前の自分と同一だと思ったのは、時間による断絶があるからだ。その断絶が自己の同一性という存在論的問題を覆い隠してしまっているのだ。

この時間による断絶というのが、哲学における人格の同一性問題でも重大な問題となる。

3 私は本当にクローンかもしれない

私には幼い頃の記憶があり、少年期の記憶があり、青年期の記憶があり、中年期の記憶もある。高年となった今、過去の自分の経験の多くは忘れていますが、何割かは記憶している。小学生の頃カブトムシを探して里山を駆け回った経験を生き生きと想起できる。

私は生まれた時から通時的に存在し、数的に同一の存在者である。——この思いは心理状態が少しずつ変化しながらも「自己の意識」は連続的で時間的に延長しているという信念に基づいている。

ただしその信念が仮に私個人の記憶のみでなく、客観的に確かめられるものだと
しても、それは必ずしも存在論的な私の数的同一性を保証するものにはならないと
いうことが問題である。この問題を考えるためにはデイヴィッド・ヒュームによる
自己の分析を理解しておく必要がある。

人は「痛み」や「甘さ」や「赤さ」など様々な経験をする。一般に人はそれら諸
経験を「私の経験」だと考える。しかしヒュームはその経験主体としての「私」の
実在を否定する。ヒュームによれば「痛み」や「甘さ」や「赤さ」などはそれぞれ
独立して存在する知覚（クオリア）であり、それら知覚を経験する通時的な「私」
という主体はない。ヒュームによれば、「私」とは実体でない。「私」とは次々と
生起する多用な知覚の集まりに過ぎず、「国家」や「大雨」のように恣意的に定め
られた規約的概念である。

このヒュームの思想は主体としての「私」を否定するので「無主体論」と呼ばれ、
後にデレク・パーフィットは「束理論」と呼んだ。パーフィットは魂のような主体
を想定したデカルトの思想を「エゴ理論」と呼んで束理論と対比させ、様々な思考
実験でエゴ理論が誤謬であることを論じている³。

現代哲学でもヒュームとパーフィットの理論は圧倒的に優勢である。

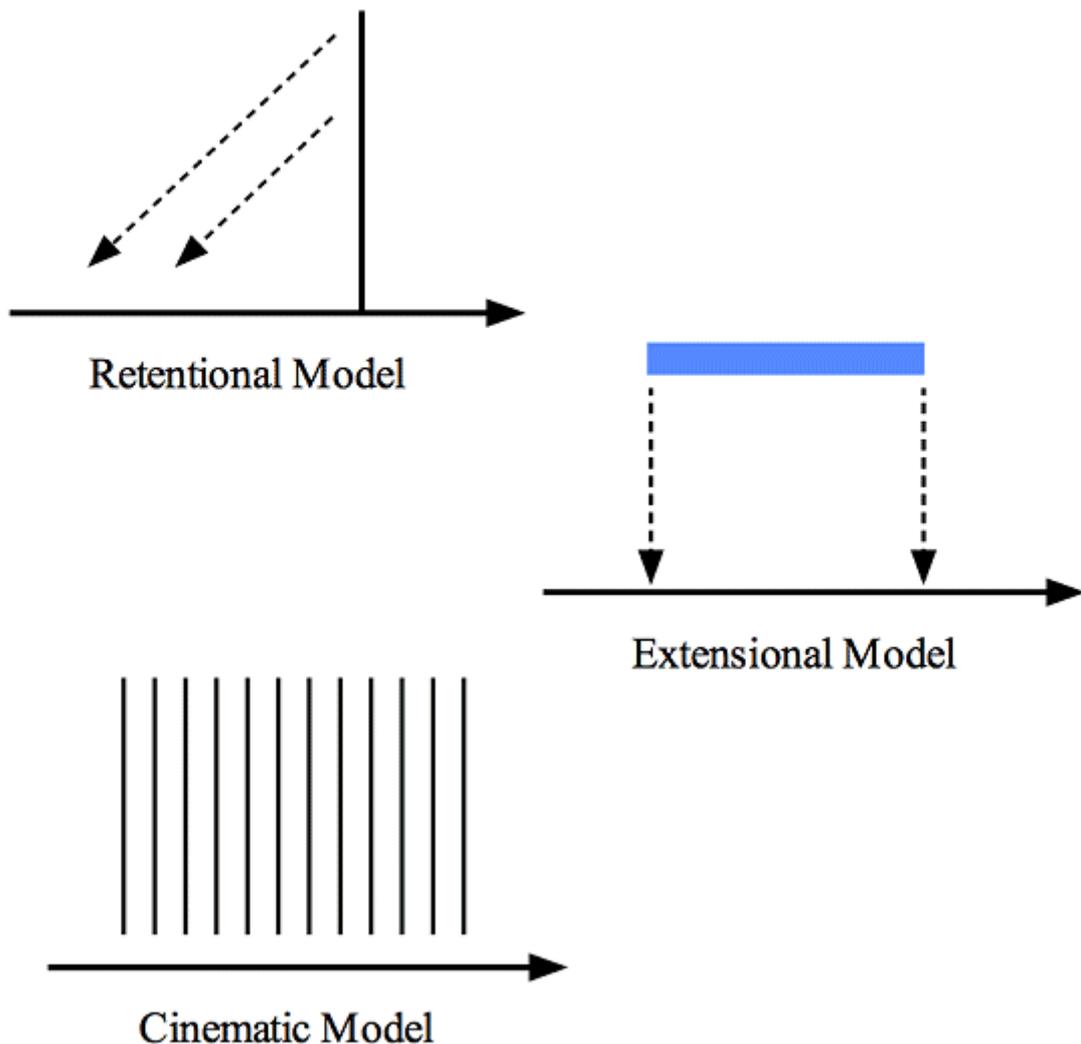
ただし諸経験を所有する主体は存在しないというヒュームの主張を修正なく引用
することはできない。「痛み」を経験する場合その所有主体（subject）が存在し
ないとしても、その経験は主観的（subjective）なのだから、主体は経験そのも
のであり、存在しないわけではない。すると「青」「痛み」「甘さ」という三種の
クオリアを順次経験した場合、それらは一つの主観的存在者の三つの性質である
とも考えられる。クオリアは異なっても「主観性」というものが通時的に同一である
可能性があるということだ。

現代ではその主観性を強調する言葉として for-me-ness や mineness が使われ
ている。Dan Zahavi によると for-me-ness とは意識の最も根本的な性質で、クオ
リアと不可分だがクオリアのことではない。何を経験するかということではなく、ど
のように経験するかということである（what-it-is-like-for-me-ness と表現さ
れる）⁴。身体が同型の双子に同タイプの意識があっても for-me-ness は異なるこ
とになる。なお永井均の用語である〈私〉も論点は異なるが類似の意味である。

先に映画シックスデイで、悪役のボスが自分のクローンと対面した際の映像を引
用したが、クローンは自分と心身ともに同型であっても for-me-ness は異なり、
〈私〉ではないことになる。

さらに現代では「意識の統一性」という認知科学的知見がある。人が街を歩くと
様々な物が見え、様々な音が聞こえるが、それら知覚たちは独立して存在してい
るのではなく、「私の意識」として統一された意識野（conscious field）にある。
したがって現代では束理論は或る程度修正すべきで、とりあえず瞬間的な意識とし
ての「私」は規約的概念でなく存在者として実在するとみなし、その意識がどれだ
け持続するかが人格の同一性問題における最重要の論点となるべきだろう。

時間意識の哲学では、通時的な意識の存在論が考究され、様々な理論が提唱されている。バリー・デイントンによればそれら理論は以下の三つに大別できる⁵。

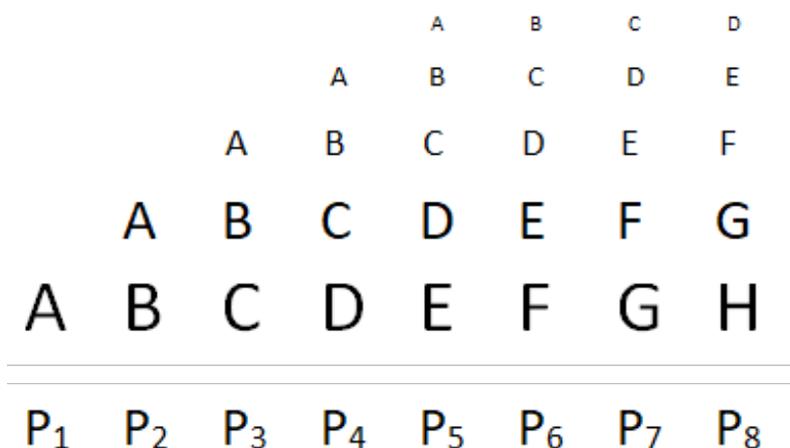


保持モデル (Retentional Model) とは、現在の意識は過去の意識を保持して存在しているという説である。なお「現在」とは物理学的に表現される幅のない時点ではなく、人が経験する主観的現在のことで、時間意識の哲学では W. ジェイムズによる「見かけの現在 (specious present)」という用語がよく使われる。

延長モデル (Extensional Model) とは、意識は時間的に延長している (瞬間ではなく時間的幅を持つ) という理論である。これは素朴な人の直観に適合するモデルである。なおこの理論は通常意識内の時間経過を認めるので、時間の哲学の A 理論と親和的で、B 理論とは相性が悪い。

映画モデル (Cinematic Model) とは、束理論を前提にして意識は持続せず映画のフィルムの一コマのように一瞬の存在だという説であり、これはスナップショット・モデルとも呼ばれる。なおこの理論は時間の哲学の B 理論と親和的である。

なお上の保持モデルの図はわかりにくいと思われるので、以下にデイントンによる別の図解を引用する 6。



この図では、各時点において各意識がどのように保持されているかを表している。P₁の時点における意識経験Aが、時間を通じて保持されながらも、少しずつ薄らいでやがて消えて行き、その間に別の意識経験が生じ、それも時間的に保持されながらも薄らいで行くことを表している。

この保持モデルは一見人の意識経験を上手く表現しているようにも思えるが、実際は映画モデルや延長モデルでも過去の意識の保持については同様の考え方ができる。つまりフィルムの一コマのような意識や、時間的に持続する意識と言っても、それらは決して人がイメージするような単純なものではなく、過去の意識経験が複雑な形で浸透したものの可能性があるということだ。したがって保持モデルは映画モデルや延長モデルに還元可能なモデルであると私は考える。

実質的には、人の意識は瞬間的とみなす映画モデルと、意識は時間的幅を持つとみなす延長モデルに大別できる。以下では前者を「瞬間説」、後者を「延長説」と呼ぶことにする。

瞬間説と延長説の対立では、前者が圧倒的に有利であることは認めなければならない。その理由は単純で、延長説には推移性の問題があるからだ。

たとえばE1, E2, E3と順次経験した場合、E1とE3には断絶があるので魂のような主体を認めない限り延長説は困難だということである。以下では交差点で三色の信号変化を経験した場合を表す。

- E1 : 「青信号」
- E2 : 「黄信号」
- E3 : 「赤信号」

E1 と E2 の間に「青信号が黄信号になる」という経験を挟んでもいいし、E2 と E3 の間に「黄信号が赤信号になる」という経験を挟んでもいい。しかし、いずれにせよ E3 の段階では E1 の色経験は存在していないのだから、E1 と E3 には断絶がある。

意識の延長説は、自分の意識が時間的に持続していくという直観と適合するが、推移性の問題からその延長幅は E1+E2、あるいは E2+E3 という二つの段階に限られるということである。なおこの場合、E1+E2、または E2+E3 は共意識 (co-conscious) であると言われる。E1 と E3 は共意識にはならない。

延長説の擁護者は必ずこの推移性の問題で行き詰ることになる。

推移性の障壁はシンプルで強固あり、延長説の擁護者が時間推移における断絶を解消としようとするなら、肉体でも精神でもない魂のような何かの存在を認めるしかないことになる（先述のように「主観性」が異なるクオリアを通じて存在する可能性も、魂のような「何か」を認める理論の一種とみなせる）。

仮に魂のような何かの存在を認めるならば、以下のように推移によっても自己の延長を認めることができるからだ。

- E1 : 「青信号」を私の魂が経験する
- E2 : 「黄信号」を私の魂が経験する
- E3 : 「赤信号」を私の魂が経験する

つまり E1 と E3 には断絶があるように思えても、魂という経験主体が通時的に存在することによって、自己は延長していると考えることが出来るのだ。

4 時間と自己

しかし以上の考えは、現在主義という時間の形而上学を前提にしたものである。時間の形而上学は大別すると変化の实在を認めない静的宇宙論と、変化の实在を認める動的宇宙論に分けられる。静的宇宙論は変化のない四次元時空が永久的に存在するとみなすので、永久主義や四次元主義とも呼ばれる。動的宇宙論には現在のみが実在的だとする現在主義や、過去と現在の实在を認めるが未来の实在を認めない成長ブロック宇宙説などがある。

現代の多くの哲学者や物理学者は、四次元時空の实在を認め、相対性理論で記述される「時間」は実在的だが、「変化」や「時間の流れ」は実在的ではないという立場である。

なお仮に変化の实在を認めるならば、それはカントがアンチノミーで論じた「過去の無限」あるいは「無からの生成」という論理的矛盾を回避できない。したがって変化の实在は認めることができず、永久主義は確実に妥当な理論だということになる*

* この問題は拙論「静的宇宙論の确实性」で詳細に論じた。

しかし永久主義を前提すると、魂のような何かを想定することによって経験主体が通時的に存在するという論法は使えなくなる。E1、E2、E3と三種の経験があった場合、それら三つの経験は三つの時点に永久に、かつ対等に存在していることになるので、「同一の自己」であることはできない。これは現在私の周囲に存在する人々が私と同一でないのと同じ理屈である。

永久主義ではE1からE3までの経験が各時点に永久的にあるとみなし、各時点の経験をB理論で箇条書きして説明する。つまり永久主義は特権的な現在を認めないので、時点を異にして存在する個別の経験（あるいはクオリアたち）は孤立した存在者とみなすことになる。

これは自分の意識が変化しながらも持続的に存在していると感じている素朴な人の直観に反するが、しかし動的宇宙論を前提しても異なる知覚は異なる存在者だとみなすヒュームの無主体論を前提するなら同じことになる。仮に「青信号が消えた」という思いがあったとしても、それは孤立して存在する意識なので、その意識があることは必ずしも以前の時点にある青信号が実際に消えたことを意味しないのである（稀に無主体論を主張しながら、自分は変化を経験しているから永久主義は間違いだと矛盾した主張をする人がいる）。

参考までに、サイモン・プロッサーはB理論を前提に、赤色などの経験をするとき心から独立に赤があるわけではないように、時間経過も心外部にあるわけではないと主張している⁷。B理論による説明はヒュームとパーフィットによる還元主義的説明とぴったり整合するのだ。

なお永久主義を前提すると、人がなぜ変化の感覚を持つのか説明できないという批判がよくあるが、これには反駁できる。四次元のブロック宇宙は物理法則という形式を持つ。そして生物の進化は宇宙の進化に付随しているので、人が変化を感じる理由も進化論的に説明でき、かつB理論で記述できる。

たとえばシマウマは「ライオンが接近する」という変化の感覚を持つはずで、その感覚がなければシマウマは生存できない。変化の感覚は進化を通じて遺伝的に継承されてきたものだと考えられる。進化は科学的に説明できるので、永久主義を前提しても変化の感覚は科学的に説明できる。

しかし永久主義を前提すると既述のように自己の存在は一瞬という甚だしく反直観的な結論になる。「時間と自己」の真の問題は永久主義を妥当と認めることから始まるのだ。

推移性の問題は前述したが、実際に「赤信号」の経験をする時には「青信号」は完全に消えているので、両者が「同一」とみなすのは困難である。

ただE1からE3までの信号変化の経験はごく短い時間内のものなので、実はそれら三者は境界も曖昧で互いに融合し合った一つの存在者だと強引にみなすことはできなくもないだろう。しかし同じことを十日前や五年前の自分の経験に適用することは極めて困難で、三十年前となると自分の心身はすっかり変貌しているので不可能と言えるだろう。この推移性の問題から「自己」という存在は一瞬とみなす論者が大半であることは事実である。

まとめると、「私」という主体が通時的に存在して様々な経験をしているという素朴な直観を肯定するためには以下の二つの条件が必要である。

条件 1 : 身体でも精神でもない、魂のような「何か」の存在を認める

条件 2 : 時間の現在主義を妥当と認める

上の二つの条件双方を認められる人はほぼいないだろう。ただ条件 1 については魂のような「何か」とは極めて曖昧な概念なので、峻拒するのも難しいと思われる。しかし条件 2 は論理的に不可能である。

したがって「私」という主体が通時的に存在して様々な経験をしているという素朴な直観は否定されるしかない。

すると今の私は数秒前の私のクローンみたいなものであることが濃厚となる。

映画シックス・デイは SF なのだが、その SF と同じ事態が現実で生じているということになる。

数秒前、あるいは数日前の私が別人ならば「人生」というものは実在しない。

自分は生まれてから色々な経験をしつつ育ち、学校で学び、やがて就職し、やがて結婚し、やがて子供に恵まれ、そして少しづつ老いて、やがて孫の顔を見、やがて死を迎える……。このような素朴な人生観は根本的に否定されなければならない。

前述のように人格の同一性問題では、最初から「私」の通時的な数的同一性を求めない立場が優勢である。ヒュームは「私」を「国家」や「大雨」のような規約的概念とみなし、「太陽」や「椅子」のような存在者の概念とは異なるとみなした。現代哲学者の多くはこのヒュームの思想を継承している。

自分の身体は生まれてから少しづつ変化しながら存続し、その身体と関連する精神も（数的に異なっても）因果的に連続して存在している。ヒューム支持者の多くはその因果的な心理的連続性を「私」とみなせばよいと考え、「私」の厳密な数的同一性を求めるのは諦めている。しかし、それはあくまで「規約」の問題であって「存在」の問題ではない。

規約で満足できる人は哲学者ではない。実際パーフィットが人格の同一性問題を詳細に論じた『理由と人格』は本質的に倫理学の著作であり、パーフィットは功利主義的な倫理学構築のために「私」を規約とみなしたと考えることが出来る。

自分のそれぞれの意識は因果関係を持って連続しているように見えるので、その連続性を「私」と恣意的にみなすことは可能である。しかしその主張は「私」とみなさにことも可能だと言うことと表裏である。

シックス・デイの悪役のボスが自分のクローンと対面した時の当惑を想起しよう。それは認識論と存在論の差異への当惑であり、規約問題と存在問題の差異への衝撃でもあった。クローンは「他人」である。自分といくら似ているからといって、その他人を「私」と思うことはできない。それは今私の近くにいる私と似た人を「私」とみなせないのと本質的に同じである。規約とはそのように曖昧なものである。存在論的な「私」の問題は決して規約の問題に還元できない。

とはいえ、先に論じたように時間の哲学では永久主義を否定することは不可能である。そして永久主義を前提するなら私の人生の各時点の意識はB理論で細切れにされて説明される。推移性の問題から今の私は数秒前の私のクローンであることが濃厚であることは事実として認めざるを得ない。六日前の私は今この私と数的に異なる存在者であり、他人となる。

私の存在は瞬間的ある可能性が高いのだ。

映画シックス・デイが哲学に寄与した問題は現実からかけ離れた思考実験ではなく、現実在即し、実存と形而上学にまたがる問題なのである。

私はカブトムシを探して里山を駆け回っていた少年期の自分を憶えている。しかし「私」の存在が瞬間的ならば、少年期の自分は今の自分と同一の「人物」であっても同一の「私」ではない。クローン同様に「他人」である。

私は永久主義が疑えない理論であることを承知しているが、それでも少年期の自分や十年前の自分、六日前や二時間前の自分が「他人」であるという帰結に納得できない。永久主義は時間の存在論であるが、B理論は必ずしも存在論的コミットメントがなく、基本的に時間の記述方法であり永久主義と親和的だというだけである（ただしB理論と永久主義を同一視する論者はいる）。私は、永久主義は必ずしもB理論と結合しないとしたい。

しかし自分の過去の諸経験が、私の認識の通りに存在するとしたら、それらはB理論で記述する他はないように思われる。もしB理論を否定するならば、それは自分の過去の諸経験が実在することを否定するか、あるいは実在する諸経験と私の記憶との真理対応を否定するという強い懐疑主義にならざるを得ない。

そのような懐疑主義を採用するのは難しいのは事実である。

ここでジレンマに陥る。

里山を駆け回る私であったはずの少年を脳裏に思い浮かべていると、ふいに少年が「あんた誰？」と言うような気がする。私は「たぶん、赤の他人だよ」と答える。

四次元の宇宙は広大無辺の大海であるとみなすことができる。その大海には夥しい潮流がある。私の人生とは、私の祖先から続いてきた一つの潮流であろう。そして「今この私」とは、その潮流の内のひとかけらの波のようなものである。——これが四次元主義と瞬間説を組み合わせることによって生じる必然的な世界観である。この世界観はそれなりにシンプルで美しく、妥当性の高さがあると認めざるを得ない。

それでも私は自分が瞬間的な存在者で、かつ「今」に永久に存在しているという理論を信じられない。「今」と言ってもその「今」はすぐ消えて行くように感じるからだ。永久に存在するはずの「今」が消えるとはどういうことなのだろう。

もちろんB理論はそのような思いも合理的に説明できる。以下のように。

時点1： 「今」は永久に存在している

時点2： 「今」が消えたように感じる

時点3： 永久に存在しているはずの「今」が消えるとはどういうことだ

各時点の意識はヒュームが言うように数的に異なる存在者だということである。この説明には重大な欠点がない。これがB理論の完全性である。

B理論の完全性を認めても、それでも私は納得できない。B理論は人格の瞬間説と一致する。私にはその瞬間説がどうしても信じ難いのだ。

永久の一瞬。……ウィリアム・ブレイクの詩ならば粹な表現だと称えることができるが、現実には人はそんな存在者を理解できない。

自己を瞬間的なものとし、それをジェームズの言う「見かけの現在」と一致するとみなす論者が多いように思う。しかしその「現在」は曖昧過ぎる概念だと思える。

そして「私」とはそんな単純な瞬間的存在者とはとても思えない。

私の人生はなぜこうなのだろう、もっと良い人生もあり得たはずなのに。——私はそんなことをよく考えるのだが、瞬間説が正しければこのような思いも完全に間違っていることになる。人生は実在しないのだから。

死も実在しない。現代では死を自分の消滅とみなす人が多いが、実は死と消滅は大きく異なる概念である。永久主義を前提するなら、死とは現在の私が百年後には生存しておらず、現存する人々が二百年後には生存していないという規約的概念に過ぎない。しかしその事実は現在の私や現存する人々が消滅する（現在の時点が消滅する）ことを意味しない。このように死と消滅には大きな相違があり、自分は死んだら消滅するという素朴な人の直観は哲学的には完全に否定できるのだ。

映画ではクローンが持続することによって自分は消滅しないと悪役は考えるのだが、哲学では既に私の消滅というものは否定されている（なお相対性理論から導出された永久主義には少数の異論があるが、カントのアンチノミーから導出できる永久主義は論理的な証明なので反駁不可能である）。

ただ何十年か後に私の死という現象はある。しかしそれは今の時点が消滅することを意味しない。「今この私」は永久に存在する。

私どれだけ持続するかという問題は「私」の哲学の最重要問題である。*

*この問題は拙論「〈私〉の持続という問題」でも考究した。

ウィトゲンシュタインは「私とはマイクロコスモス（小宇宙）である」とみなした。これは或る観点からは事実であるが、仮にそのマイクロコスモス内に「痛み」しか存在しないのなら、「私とは痛みである」とも言える。

永井均は「私とは無内包の現実性である」とみなした。これはウィトゲンシュタインの洞察を認めた上で、多くのマイクロコスモスの中で、なぜこのマイクロコスモスが「私」なのかという問題の解答である。この解答も正しいが、しかしその「私」の中に「痛み」しか存在しないのなら、やはり「私とは痛みである」とも言える。

マイクロコスモスや無内包の現実性という表現は「私」の特徴を上手く表現したものであり、それらが「私」という存在の真理の一面ではあることは事実だが、それでも一番重要な問題の解答にはなっていない。

一番重要な問題は、「私」が時間的にどれだけ延長し、どのような内容を持っているかということである。私が一番知りたいのはその問題である。

B理論と瞬間説では、せいぜい一つか二つの内容しか持てないことになる。その信じ難い結論が正しい可能性は認めざるを得ない。

私の持続という問題はB理論という身も蓋もない結論で終わっている可能性が高い。

それでも私はB理論に納得できない。

私はこの問題を死ぬまで考え続けるだろう。しかし、その「死ぬ私」とは何者なのだろう。そいつは「今この私」のクローンに過ぎない可能性が高い。しかし、その「今この私」とは何なのだろう。永久に存在するはずなのに一瞬で消えて行くように思える。B理論で説明できても直観的に受け入れられないその「今この私」が、最も正体不明のものであると感じるのだ。

脚注

- 1 映画『シックス・デイ』
- 2 映画『シックス・デイ』
- 3 Derek Parfit, 'Reasons and Persons', Chapter 12
- 4 Dan Zahavi and Uriah Kriegel, 'For-Me-Ness What It Is and What It Is Not'
- 5 <https://plato.stanford.edu/entries/consciousness-temporal/>
- 6 Barry Dainton, 'the experience of time and change'
- 7 Simon Prosser, 'COULD WE EXPERIENCE THE PASSAGE OF TIME?'

文献

映画『シックス・デイ』(2000), CoLUMBIA PICTURES INDUSTRIES, INC

Dainton, B(2008), 'the experience of time and change', Philosophy
Compass 3 (4):619-638 (2008)

Lee, G (2018)'SELFLESS EXPERIENCE', Philosophical Perspectives, 00,
2018

Parfit, D(1986), 'Reasons and Persons', OXFORD UNIVERSITY PRESS

Parfit, D(1987), 'divided minds and the nature of persons'

Prosser, S(2008), 'COULD WE EXPERIENCE THE PASSAGE OF TIME?', Ratio 20
(1):75-90 (2007)

Zahavi, D and Kriegel, U(2015), ' For-Me-Ness What It Is and What It Is
Not' , Philosophy of Mind and Phenomenology. Routledge

Copyright

映画『シックスデイ』で考える〈自己〉の問題

著者 : エレア・メビウス

発行日 : 2023年1月5日